

## ヒトラーのための虐殺会議 (独・2022)



一九四二年一月二〇日正午から、ドイツ・ベルリン郊外のヴァンゼー湖畔に建つ豪邸で、ナチ党と政府双方の高官一五人による会議が開かれた。議題は「ユダヤ人問題の最終的解決」についてである。わずか九〇分でそれは全員一致で承認された。

説明役兼書記役を務めたのがアドルフ・アイヒマンである。当時三五歳で国家保安本部ゲシ

ある。そのため映画音楽は一切流れない。

議長は国家保安本部長のラインハルト・ハイドリヒである。直属の上司が親衛隊全国指導者のヒムラーだった。ナチ党ナンバー2であり帝国元帥の称号ももつゲーリングから指示を直接受けていた。この二人を後ろ盾にハイドリヒは

議事を肅々と進めていく。丁寧な言葉遣いで微笑を絶やさず決して感情的にならない。明確に受け答え、詳細はアイヒマンに委ねる。

アイヒマンは能吏ぶりを遺憾なく発揮し、彼が決して凡庸でないことがわかる。「よくやった」。会議終了後、アイヒマンは副議長格で議論を要所所で締めていたハインリヒ・ミュラー国家保安本部ゲシユタポ局長から、こうねぎらわれる。出席者のうちナチ党高官はナチの制服を着用し、政府高官はスーツ姿である。従って「政官対立」がわかりやすい。「政」のナチ党側の提案に対して、「官」の政府高官たちは難色を示す。ユダヤ人は全欧で一〇〇万人もいる。予算や「解決」方法、法的観点などから問題が多すぎると。政府高官同士が縄張り争いを始めたり、ある合意点に達すると「議事録にとどめてくれ」と求めたりするシーンもある。職場の会議かと錯覚しそうになった。言い

換えれば、大虐殺からは天文学的な距離があるほどの事務的会話なのだ。

非現実的だと依然として納得しない「官」側に対して、ハイドリヒは究極の秘策をアイヒマンに説明させる。強制収容所に鉄道で移送して、ただちにガス室に送り込んでツイクロンBにより「解決」を図るといふものだ。これにある次官がドイツ人が手を下さずに済み「人道的だ」と衝撃の台詞を吐く。

本作の原題は「Die Wannseekonferenz (ヴァンゼー会議)」である。これでは興収は期待できないので、上記の邦題にしたのだろうか、気に入らない。本作にヒトラーは登場しないし、出席者の発言もさしてヒトラーには触れていない。果たしてだれのための虐殺会議だったのか。出席者各自の保身と出世のため、彼らそれぞれが背負う組織の既得権確保と権限拡大のための会議ではなかったのか。そして、あたかも鳥インフルエンザの殺処分を段取りを決めるかのよう、諸機関の間で事務的な調整が図られた。ある者は出されたコニヤックを飲みながら。

六〇〇万人のユダヤ人が虐殺されたとの字幕のあとに流れる無音のエンドロールに、鳥肌が立った。(二〇二三年一月二七日・新宿武蔵野館)

西川伸一 (にしかわ・しんいち) / 明治大学教授